



爆乳人妻08号さんを  
騙して犯して牝ペットにしちゃうお話

Lunatic Orgasm

「オイ。楽に金儲けができるってのはホントなのか？」

もう使われなくなった人気のない廃校に呼び出された〇8号はいぶかしげに目の前の男に尋ねた。

「ええ、ええ。そりゃあもう！〇8号さんのその美貌があれば、楽々がつぼり大儲けですよ！」



「どうゆーことだ？」

「いやあ、簡単なことですよ。○8号さんをグラビアアイドルデビューさせちゃおうって話です。」

街を歩けば誰もが振り返るその美貌！完璧なプロポーション！

それを写真や映像に収めて販売すれば売れない訳が無い！

世界中の全ての男共が我先にと買い求めるでしょう！」



「な、なるほどな……。ま、まあ、それは当然だろう……。」

「一回撮ってしまえばいくらでも複製できますから、元手もほとんどかからず大金ゲットって寸法です。もちろん〇〇8号さんには1ゼニーも出して頂く必要はありません。」

「ふうん。悪くないな。ノーリスクってことか。」





「で、具体的に何をすればいいんだ？大変な仕事じゃないだろうな。汗水たらして働くのなんて勘弁だよ。」

「いやいや。ご心配なさらずに。難しいことじゃありません。

○8号さんにはこちらの用意した衣装に着替えて頂いて

簡単なポーズや演技をして頂くだけです。

あっという間に終わりますよ。」





「ふーん……。よし、やってみようじゃないか。

……分け前は8・2でどうだ？もちろん8が私だ。」

「ええ、ええ。それで結構です。さあさあ、それよりも早くこちらへどうぞ！

もう準備はできていますから、お着替えなさって下さい。

一緒に良い作品を作ってポロ儲けしましょうじゃないませんか。

うへへへへ……。」

「…着替え終わったが…。これはどーゆー服だ？」

「セーラー服という女学生の着る制服ですよ。  
いやあ、良くお似合いだ。」

「こ、こんなスカートが短いものなのか？」

「ええ、もちろんです。さあ、早速撮影に入りましょう。」



「スースーして落ち着かないな……」  
「まあまあ、すぐに慣れますよ」

「……ずいぶん低いアングルから撮るんだな」  
「素晴らしい脚線美をしっかりとフィルムに  
収めないといけませんから。ひひひ」







「下着が見えちゃうだろ」  
「ぎりぎり見えないように考えてますから。ひひっ」

「……これを壁に貼ればいいのか？」  
「そうです。椅子を台にしてなるべく  
高いところをお願いします♡」

ひひっ♡

ひひっ♡

ゆっ♡

ひひっ♡



「あつと、椅子が不安定なのでスタツフが押さえますね。」

「ああ、すまないな。」

「さあ、足元は気にせず続けて下さい♡」  
「おほっほっほお♡〇8号さんのパンツが丸見え見放題だぜ♡」

（クンクン♡はあはあ。  
むちむちぷりぷりの尻からメスの匂いがムンムン漂ってくるぜ♡  
うひひっ♡我慢できねえ。アレやろうぜ♡）

むっ♡

ゆっ♡

ぶっ♡

はぁ♡




「次は何をするんだ？」

「次はちよつとしたゲームで楽しみましょう♡  
目隠しをして口と味だけで物を当てるゲームです。」

「ふうん。面白いじゃないか。」

「グラビアアイドルってのはこんなこともするのか？」





「ええ、最近の流行りなんですよ。

真剣にゲームに挑むアイドルの様子が  
マニアに大ウケで…。

〇8号さんも是非頑張ってくださいね♥」

「ふん、まかせろ。くだらないが、本気で当てに行つてやる。  
勝負事に負けるのは腹が立つからな。」

「おっ、いいですねえ♥(うひひっ)それでは始めましょうか。

3本のソーセージの内、一番高級なものはどれか、当てて下さい。  
はいっ、あーん♥」



「あーん」





「ぺろっ、はふっ…」

「嚙んだり食べたりにしてはダメですよ。

あくまで舌の上で感じる味覚で当てて下さい♡」

「ほおん、きびひい、ぺろっ…ルールだな。」



「よし、どんどん来い。」

「はい、もう2本目ですよ。」



「へろへろつちゅぽっ」  
「どうですかあ？微妙な塩加減と舌触りがカギですよお♥」

「わほほほほ。じいさんさん。」





「はい♡いよいよ本目です♡はあはあ♡  
これは特にたつぷりねぶつて味わって下さいね♡」  
「ああ、言われなくてもきつちり味わい尽くしてやるよ♡」  
「ほほっ♡でわでわ…。あーん♡」

おんち...

「あーん♡」







「♡♡♡♡♡♡♡♡♡♡♡♡♡♡♡♡」  
「♡♡♡♡♡♡♡♡♡♡♡♡♡♡♡♡」

「♡♡♡♡♡♡♡♡♡♡♡♡♡♡♡♡」  
「れろれろろろ、ちゅぽろろろろろろろろろろろろ」  
「♡♡♡♡♡♡♡♡♡♡♡♡♡♡♡♡」



「れろれろ♥ちゅっ、はぶっはぶっへろっ♥」  
「は〜、あっ、そっっ♥そっっ♥あひっっ♥」

れろ

れろ

「れろれろれろれろれろれろれろれろ♥」  
「あっ♥あっあっあっあ〜♥♥♥♥♥♥♥♥♥♥♥♥」



「おい。さつきから何を呻いてるんだ？気持ち悪いぞ。  
あと、このソーセージは随分しょっぱい味付けだな。」

「はあはあ、いやいや、この塩味がこのソーセージの特徴でして……。  
中に旨味の凝縮した肉汁がたっぷり練り込まれてるんですよ♡」

「試しに口いっぱいに入れて含んで全体を扱くようにしゃぶってみてください♡」  
「ほお、やってみようか。」





「あんむっ…」



「ちゅぽっ♡ちゅぽっ♡ちゅぽっ♡ちゅぽっ♡ちゅぽっ♡」  
（おふっほっほっ♡舌が絡みついてきて搾り取られるっ♡）  
「ちゅぽっ♡ちゅぽっ♡ちゅぽっ♡ちゅぽっ♡ちゅぽっ♡ちゅぽっ♡」  
「あっ、あっ、も、もうデますよー！肉汁っ！」  
熱々の肉汁っ、味わって下さいー！！」  
「ふもっ♡じゅるっ♡じゅるっ♡じゅるっ♡じゅるっ♡じゅるっ♡」





「んっっっんっ〜」  
「おっ♡おっ♡おっ♡おっ♡おっ♡おっ♡おっ♡おっ♡おっ♡おっ♡」  
「♡」





「んぐっ、じゅちゅっ…んんっう。」  
「ふう…♡いかがですか？濃厚でしようっ♡」  
「苦しよっぽくて…んぐっ、のどにからみついできて…じゅる。  
変わったソーセージだな…。はあはあ…」



「さあさあ、次のシーンに移りましょう。お着替えは終わり…、  
…おほつ♥…こちらもお似合いですねえ♥」

(極上ムッチムチブルマだ、たまんねえ♥やべえ、勃起がバレちまう♥)

「…これも学校用の服か？そこそこ恥ずかしいぞ。」

「これもグラビア撮影では定番の衣装ですよ。ささつ、早く早く。  
すぐに撮影に入りましょう。スタッフ全員お待ちかねですよ♥」





「いっちに、さんしつ……。いやあ、意外とお体硬いんですねえ♥」  
(こんな柔らかかそうな太モモと、たつぷたつぷの爆乳付けてるのになあ♥)

「んんっ……。ああ。しばらく体を動かさような(こ)も  
無かったしな。」

「いけませんねえ。たまにはしつかり汗をかくような  
運動もしないと♥」

「んんっ♥」

「んんっ♥」

「んんっ♥」



「それで・・・お前たちは何してるんだ？撮影中だろう？」

「あ、このシーンでは男子生徒と女子生徒のカラミ・・・

いや、交流をイメージしてまして、一緒に柔軟体操をさせて頂きます。」

(はあはあ、脳みそとろけるようなイイ匂いさせやがって♡)

や、や、や、♡

や、や、や、♡

や、や、や、♡

「カメラの画角の関係でちよつと窮屈かもしれませんが、このまま撮影を続けましょう。」

(ちよつと動く度に乳首プックリ爆乳がゆさゆさ揺れて、こっちは先走り液だくだくだせ、このエロ人妻が♡)

「そうか。まあ、そういうことならいいが・・・。」





「では、ストレッチの続きを…。」

「あつーお、おいっーなにしているんだよー。」

ガッ

ふん

ふん

さっ

「いや、体の硬い〇8号さんのお手伝いです。  
女生徒を助ける優しい男子ってシチュエーションですよ♡」

（うへへ、肌すっぺすべ♡マジでむき卵みてえにプリップリだぜ♡）

（たつぷたぶのデカ乳も想像以上のボリュームだ♡）

（ああ、早く嫌ってほど無茶苦茶に揉みしだいて弄くり回してやりてえ♡）





「手伝いつて…、ちよつと手つきがおかしくおかしくないか？」

「こーゆーマッサージなんですよ。こうすれば温まって体が柔らかくくなりますからあ♥」

(部分的にはプツクリコリコリしてくるだろうけどな♥)

「そ、そうなのか…?」

「ストレッチですから、多少体が密着するくらいは多目に見て下さいよ。大金ガツポリの為です♥協力して頑張りましょう♥」

「あ、ああ、わかつたよ。くつ、んつ…♥」



「おつ、おいーこれもストレッチなのかー？」

「次は男女混合のマット運動のシーンですよ  
〇8号さんはそのまま身を任せて下さい♡」

「胸が出ちまつてるだろー！  
それに何でお前ら裸なんだー？」

「閉めきった倉庫ですから、  
蒸し暑くて。へっへっへっ♡」

「お、お前ら……。いいから一回離せ！  
くそっ、おかしい。ち、力が出ない……。」

「ヤキッ」

「ヤキッ」

「グッ」

「グッ」





「ダメですよ、そんな動かれるとお気持ちよくなって堪らないじゃないですか♡」

「いい加減に…」

「…へへっ、怒って暴れられると洒落になりませんからね。クスリ使わせて貰いましたよ。」

「…？…休憩の時の水か…」

「もう体が火照ってきてるんじゃないですか？そんな腰をくねらせて♡」

「な、なにを……っ！」

「ヤッ、」

「ヤッ、」

「ぐっ♡」

「ぐっ♡」

「よっ、と♡ほらほら、おま○こはもうぬれぬれですよ♡」

「なっ？？やっ？？やめろっ！」

「おほっ♡愛液ダダ漏れでテカテカ光って、すげえエロい♡」

「それに人妻とは思えない新品みてえに綺麗なおま○こしてやがる♡  
びっちり閉じてて、ピンク色で……。」

「みっ、見るなっ！くそっ！  
…お前らっ、覚えてろっ！」

「グニーン♡」



「そんな怖いこと言わないで下さいよお。  
ほらっほらっ、キモチイイでしょ♥」

「あんっ!♥…やっ、やめろ!  
腰を動かすなっ!」

「可愛い声出すじゃないですか♥  
ちんぽにキマますよ…♥  
いつもそんな喘ぎ声で  
旦那を喜ばしてるんですか♥?」

「うっ、うっ、うっ…  
知るかっ!」





「ああ、もう我慢できねえーよとと…。」

「っ！？…なにをする気だ！」

「こっちもこんなエロエロボディと密着しててちんぽが限界なんですよ。見てくださいよ、俺の自慢の肉棒を♡

さつき一発抜いてもらったばっかなのにもうバッキバキに復活してますよ♡」

「？…ぬ、抜いて…？」

「今すぐコレで、おま○こすぼすぼして嫌ってほごイカせてあげます♡はあはあ♡」







「やっーやめろっー!」

「もう観念しな♥俺達が一晩かけて  
立派な牝にしてやるよ♥」

「だっ、誰が…」

「はあはあ、よし、いくぜ。  
…せえ〜のっ…」

ヤッ

ヤッ







「おりやつー！おりやつー！」  
「んああつー！ああつー！」

「ほほっ♡〇8号さんのエロまの♡っ♡  
奥まで熱々でヤケドしちまいそうだっ♡」  
「すげえ、極太ちゃんぽ根本まで  
ウマそうに啜えこんでやがる♡」  
「突かれるたんびに尻肉ふるふる  
揺れてんぜ♡…おい！早く代われよ、  
辛抱たまらねえぜ！♡」

あーっ

あーっ

あーっ

びしょびしょ

びしょ

びしょ

びしょ

びしょ

びしょ

びしょ



ばんばんばんばんっ♡

「んあー……ぎゅぎゅめろっ……。」

「何言ってるんですかあ。〇8号さんも

もう気持ちよくて堪らないんですよ♡」

「顔がうつすらピンク色に染まって

発情してんのバレバレだぜ♡」

「喘ぎ声もだんだん蕩けて

きますよーおらっ♡おらっ♡」

「そんっ……なっ……はんっ！♡あんっ♡」





「はちゅっーぶちゅっーぶちゅっー」

「あんっ♥んああっ♥はあんっ♥」

「んんん」

「おいおい、すげえ高速ピストンだな。挿れてからずっとノンストップだぜ。」

「〇〇号さんも体ビクビクさせて意識飛びそうになってるし♥」

「うひひっ♥気持ち良すぎて」

「腰が止まらねえのよ♥…ダメだ、もう保たねえっ♥このまま出すぜ!♥」

「ひゅっ♥…っだ、出すって…」

「んんん」

「んんん」

「んんん」

「んんん」

「んんん」

「んんん」



ビュクッ♥ドクッ♥ドクッ♥ドクッ♥

「びしょ〜〜〜」  
「びしょ〜〜〜」

びしょ

ドクッ

びしょ

びしょ



「はっ♥ふあっ♥んんっ……!!」

「……ふう♥人妻発情ま〇こ最高♥  
あつという間に搾り出されちまつた♥」

「へへっ♥〇8号さんを見ろよ、  
びくびく痙攣しちゃって可愛いぜ♥  
大満足の中イキだったんだろ♥」

「くそっ、遠慮なく中出ししやがって。  
後の奴のことも考えろよ!」

「はあはあ、お前も早く挿れてみるよ♥  
子宮に精子注ぎ込むことしか  
考えられなくなるからよ♥」

「こんな名器、滅多に出会えねえぜ♥」



「んあつ……！。くっ。こ、こんな格好。や、やめてくれ……。」

「おほっ♥こりやいぜ♥あの〇8号さんがすっかり性処理便器に早変わりだ♥」

「見ろよ、もう次のちんぽ欲しがって、おま〇こヒクヒクさせてんぞ♥」

「ーち、違う……っ。イ、イッたばっかりで……。ううっ、そんなジロジロ見るなあ……。」

「これなら自分がずぼずぼされてるとこバッチリ見えますよ♥」

「やあっ……！あああ……っ♥」

「ひひひっ、カメラアングルもばっちりだ。

さあ、また気持ちいいマット運動のシーンの続きですよ♥」





「でわでわ♥お待ちかねのおちんぼ様ですよ〜  
たつぷり味わって下さ〜い♥」

「だ、ダメだ!...お願いだ、またあんな風にされたらっ...もうっ...。」「

「おほほっ♥ぱっくりおま〇こが、ちんこの先つぽ啜え込もうとして  
必死にちゅっちゅちゅちゅっちゅ吸い付いてきやがる!♥  
あ〜♥すげえ♥ねっとり吸い込まれていくぅ〜♥♥♥」





「くそっ！おらっ！こんなエロい体！こんな気持ちいい穴付けてやがって！反則だろ、こらあ！」

「あっ♡おうっ♡だ、だめえっ♡そんなっ激しくしな…、ああっ！♡」

「町の男は全員お前を見かける度にこの色白ボディを想像してちんこバキバキに勃起しちまうんだっ！♡」



「おらっ♡謝れっ！下品ではしたない淫売みたいな体してごめんなさいってな！♡」

「やっおっあっあんっ♡♡ごめんなさいっ！♡」

「俺が！晩かけてお仕置きしてやるっ♡わかったかっ！♡」

「あっ♡あんっ♡あんっ♡はあっ♡はいっっ！♡ああっあっ！♡♡♡」



ズツチュツ♥ブチュツツ♥ズツチュツズツチュツ

「はあつはあつーよしつ、イクぞつー！俺も一番奥に最後の一滴まで熱いの  
注ぎ込んでやるからなつー！お仕置き妊娠だつー」

「い、いやつ♥もう中は許してつー！孕むつ、孕んじやうつ♥！」

「ちんぽキュウキュウ締めつけといて何言つてんだつ  
観念して元気な赤ちゃん身籠りやがれつつ♥  
はあはあつ♥もうイクぞつ♥イクぞつつ♥」

「あつ♥あつ♥あゝゝゝつ♥だめえええつ♥」





「~~~~~」

~~~~~

~~~~~

~~~~~

~~~~~

~~~~~

~~~~~



「.....はあああ.....♡♡♡♡♡」  
「♡♡♡♡♡あははははは.....♡♡♡♡♡」

♡♡♡♡♡あははははは♡♡♡♡♡♡♡♡♡♡♡





「…ふう、種付け完了、つと」

「結局お前も中出しかよ。」

「あく、お前の言ったとおりだった♡外出しなんてありえないわ。」

「な？最高のハメ穴だったろ？こりや当分楽しめそうだぜ。」

「…はあっ♡…はあっ♡」

「すっかり牝の顔になっちまって♡

こりやもう俺達のちんぽにメロメロになっちまってるな♡」

「へへっ♡○8号さん、まだまだ撮影は続きますよ♡

大好きなお金、ガツポリ稼ぐために頑張りましょうね♡」

「ぐ、」

「30」

「しる〜」

---数日後---

「あんっ♡あんっ♡あんっ♡はんっっ♡」

「あく♡超気持ちいいよ、牝猫〇8号ちゃんのサカリま〇っ♡」  
「ふあっ♡ありがどういっさいますうっ♡あんっっ♡」





あれからたつぷり牝として調教された〇8号さん。

今ではすっかり自分からちんぽにむしゃぶりつく立派な淫乱人妻に生まれ変わりました。

ただ旦那さんの粗チンでは、もう満足できなくなってしまうたようですがね♡

今日はAVデビュー作目のラストのハメシーンの撮影です。

と、言っても当人は仕事だなんて認識も無く、ただ発情してハメ狂ってるだけ♡

好きなだけオスチンポと交尾できて本当に嬉しそうです♡





ちなみに、このデビュー作はもうすでに予約殺到。

○8号さん自らご奉仕する金持ち向けの「裏」感謝会も実施予定♥

2作目、3作目も当然制作決定♥

(もちろんゴム無し、ガチ孕ませセックスですよ♥)

○8号さんのこれからのご活躍をお楽しみに♥





「イクぞっ！ たぷり出るぞっ！♡おらっ♡おらっ♡おらっ♡おらっ♡」

「おあっ♡出してっ♡いっぱい精子ミルクちようだいっ♡あんっ♡あんっ♡」





「このどスケベ猫がつ♡おらあつ！孕めえつ♡」

ビュツ♡ビュルルツ♡

「あぁあ♡♡♡イツ♡♡♡イツ♡♡♡イツ♡♡♡イツ♡♡♡」





「あつ♡…あおつん♡…はあつ♡…ん♡」

「…お♡う♡う♡う♡…ふ♡う♡う♡」

「…一滴残らず絞り出されちまったぜ♡」

「そんなに精子ミルクが好きなのか？この淫乱発情牝猫め♡」

「はあつ♡はあつ♡…はい♡好き、好きですう♡」

「青臭くてどろどろのザーメンミルク、お腹いっぱいになるまで、」

「もっと注ぎ込んでください♡♡♡」









終わり♡